

あさひ
朝日遺跡

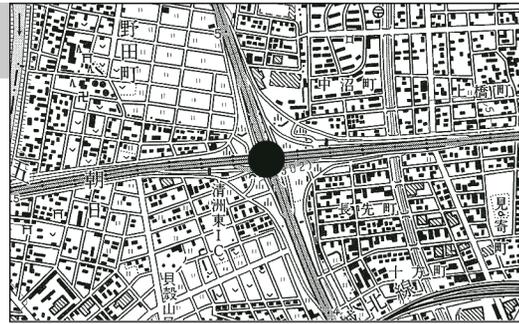
所在地 清須市ほか
(北緯35度13分18秒 東経136度51分18秒)

調査理由 名岐道路・近畿自動車道名古屋関線清洲JCT・県道
高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線

調査期間 平成17年10月～平成18年3月

調査面積 2,995㎡

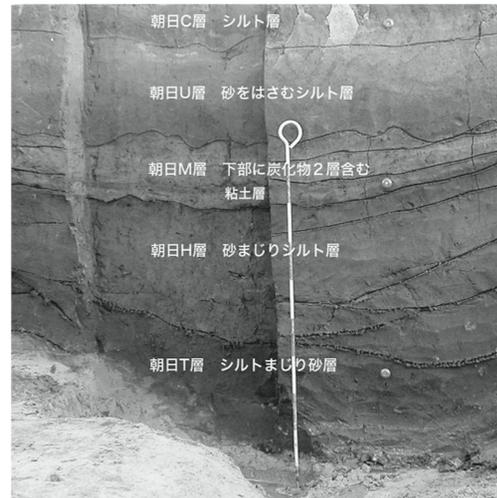
担当者 赤塚次郎・永井宏幸・川添和暁



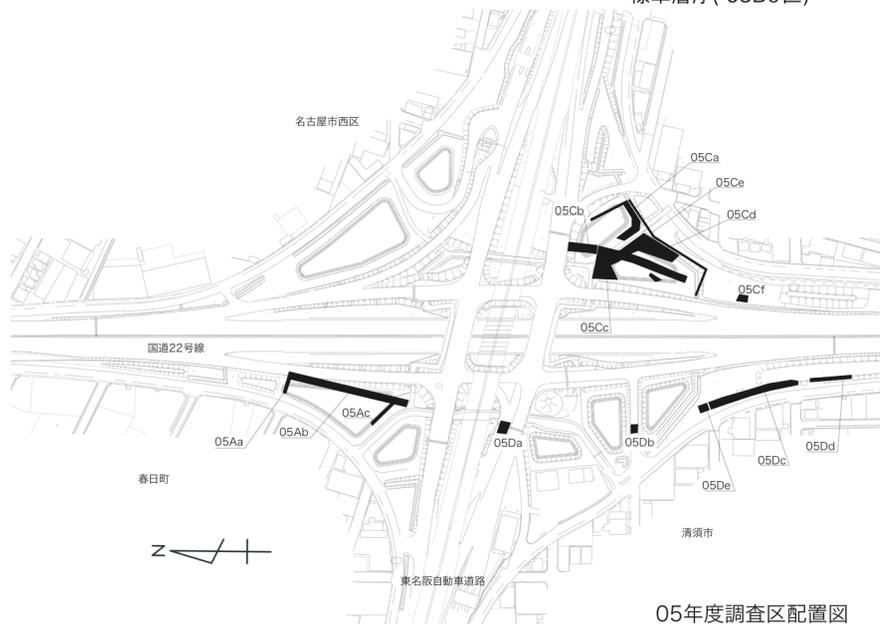
調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 本遺跡は愛知県清須市・西春日井郡春日町・名古屋市西区に広がる、県下最大規模を誇る弥生時代集落である。調査は名岐道路・近畿自動車道名古屋関線清洲JCT・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線に伴う事前調査として、国土交通省愛知県道事務所・中日本高速道路株式会社・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は、2,995㎡を対象として、05Aa区・05Ab区・05Ac区・05Ca区・05Cb区・05Cc区・05Cd区・05Ce区・05Cf区・05Da区・05Db区05Dc区・05Dd区・05De区の14調査区を設定し、調査を行った。

標準層位 朝日遺跡における標準層位については、現場における検討を経て、右図のような基本案を作成し、調査に対応した。上位より朝日C層・朝日U層(砂をはさむシルト層)・朝日M層・朝日H層・朝日T層・朝日B層(基盤層)。また朝日U層と朝日M層との間に不整合面が見られる。現状では、朝日M層が松河戸様式を中心とした古墳時代前期後葉段階、朝日H層を廻間様式を中心とした堆積層と想定している。(赤塚次郎)



標準層序(05Dc区)

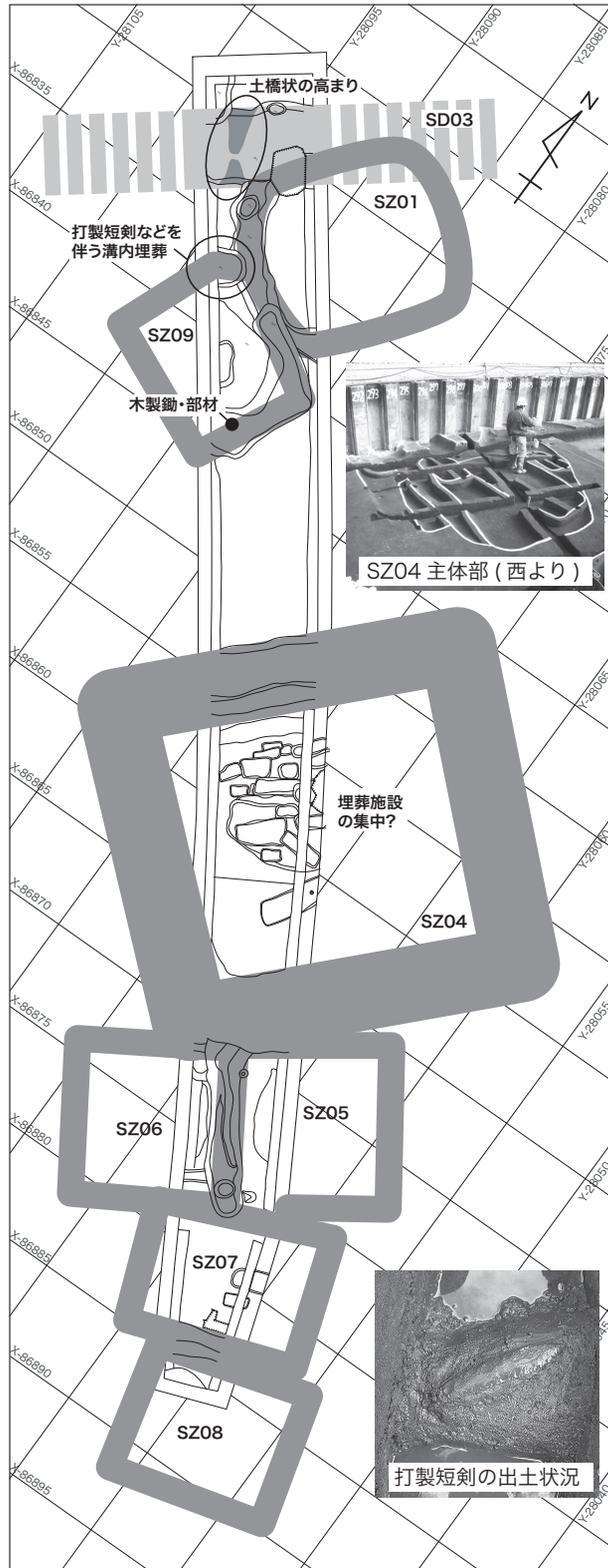


05年度調査区配置図

D c 区 遺構の時期は中世末期・弥生時代中期後半・弥生時代中期前半以前の大きく3期に分かれる。中世末期では方形土壇が7基検出された。弥生時代中期後半では、東西に延びる溝1条の南側に方形周溝墓が7基が展開しているほか、廃棄土壇や住居跡1軒が検出された。弥生時代中期前半以前では、上記溝1条をはじめ、方形周溝墓の周溝や土坑が見つかった。

区画溝 調査区北隅に存在する溝SD03を境にして、その南側には方形周溝墓群が展開する。SD03は弥生時代中期前葉に掘削された溝で、朝日遺跡谷C左岸に展開する集落遺跡の南限を区画する溝として考えられている。SD03下層には、掘削時期が朝日式期に遡る溝が存在する。弓片や部材と考えられる木製品(片)などが出土している。SD03は貝田町式新段階に、溝内に土橋状の貼出部が作られている。貼出部の東側には細頸壺をはじめとする土器群とともにイノシシ下顎骨が出土している。

方形周溝墓 方形周溝墓はおおむね高蔵式期を中心にして展開するものであるが、貝田町式新段階に所属する方形周溝墓と一部に重複関係がみられる。特に注目される遺構としては、調査区中央部付近に存在する方形周溝墓SZ04がある。規模的にも比較的大きなものであるが、さらに墳丘上



05Dc 区弥生中期後半主要遺構配置図(1:400)

には複数の埋葬施設が重複して存在している。また、SZ09 は北溝にはやや不定形な陸橋部が認められるもので、南側溝内からは部材および鋤?の木製品が並べられた状態で出土している。周溝内から溝内埋葬と推測できる土壇を検出した。そこからは打製石剣・赤色顔料が付着する摺石・磨製石斧片および粗製有孔鉢が出土している。(川添和暁)



05Cc区SD01(南東より)



05Cc区SD01埋土セクション



05Cc区土器集積(弥生中期後葉)



05Cc区SD09内土器棺墓(弥生中期後葉)



05Cc区弥生中期後葉全景(北より)



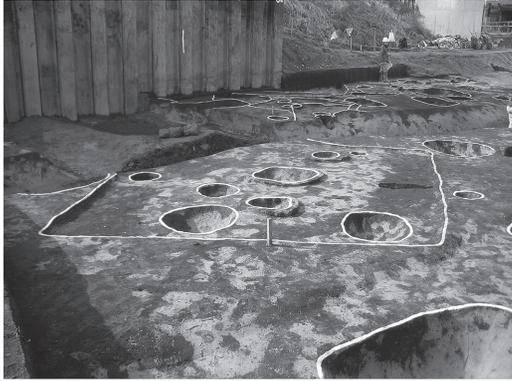
05Cc区SB25(弥生中期前葉)



05Cd区SD06(南より)



05Cd区SD06埋土セクション



05Cd区SB18(弥生中期後葉)



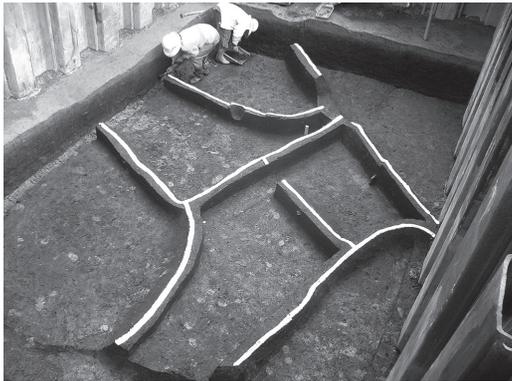
05Cd区SB09(弥生中期後葉)



05Cd区SK128(弥生中期後葉)



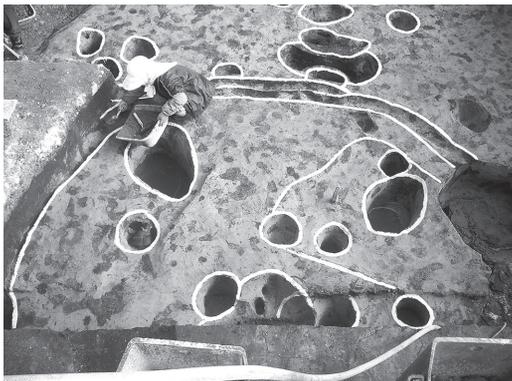
05Cd区弥生中期中葉～後葉全景(北東より)



05Db区弥生中期末～後期初頭全景(北西より)



05Db区弥生中期初頭～前葉全景(北西より)



05De区弥生中期後半全景(西より)

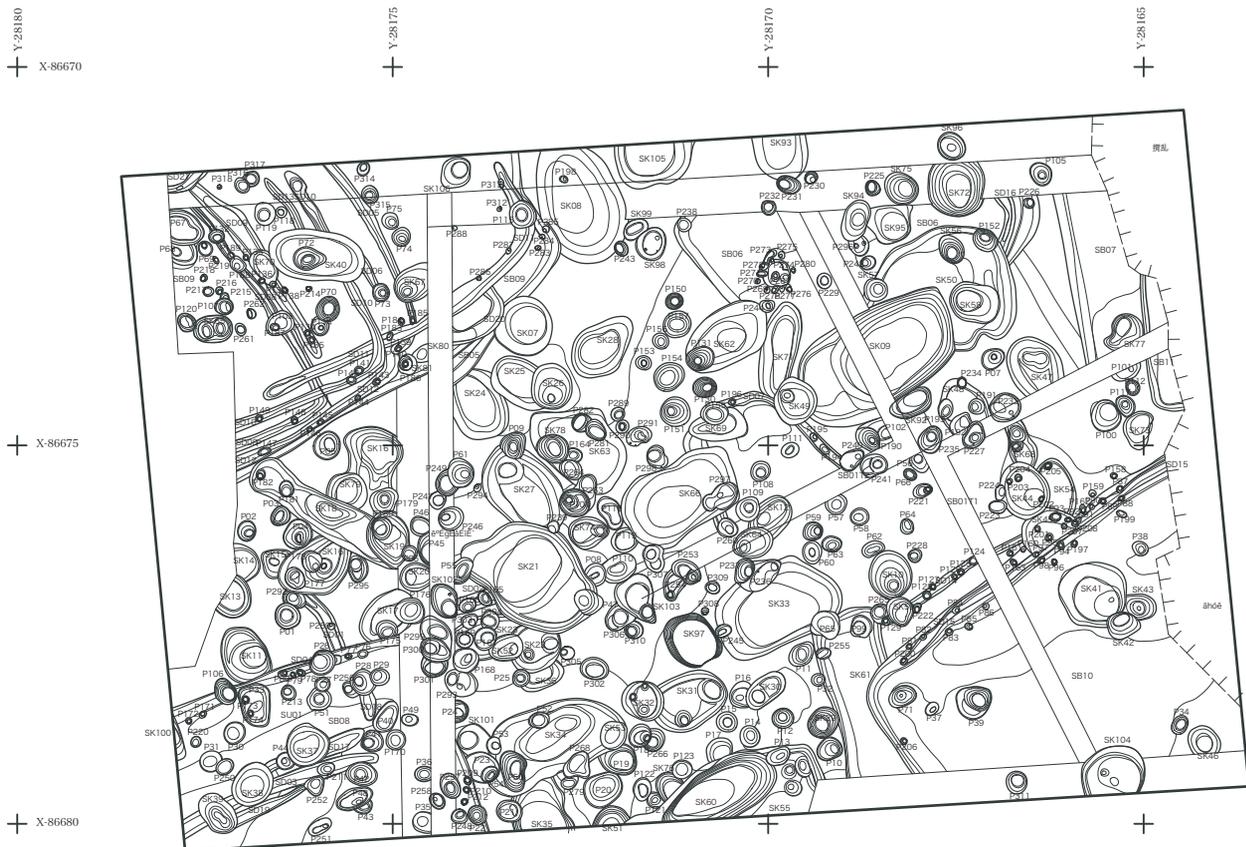


05De区住居内土器埋設遺構(弥生中期中葉)

05Da区 調査地点は、朝日遺跡南集落内の北端部にあたる。朝日H層が10cm前後不整合面を伴って堆積し、その下部に黒褐色のシルトまじり砂層である朝日T層が20cmから40cm堆積する。朝日H層を除去するとおおむね三個所ほどに大きな落ち込みが確認でき、竪穴建物が存在することが想定できた。調査の結果、これらの竪穴建物は山中II式期を中心としたものと考えられる。その後、整地層などを除去する過程で、朝日T層下位付近から新たに複数の竪穴建物を発見した。結果的に調査区北西及び南西・南東隅に竪穴建物が検出でき、その内で南東隅で確認したSB10は、床面に複数の貼床を伴うものであった。掘方は朝日B層を20cmほど垂直に掘削し、底部の貼床は、建物南東隅で3cm単位の三層構造が見られた。朝日B層と朝日T層を攪拌したような、きめ細かな細斑土で丁寧に築固められた状況である。出土した土器などから山中I式期に所属するものと思われる。その他の建物や土坑などもおおむね山中式から八王子古宮式期にかけてのものと想定できる。ただ、大型の土坑などからは高蔵式期の土器が出土しており、中期末葉段階の遺構が重複しているものと思われる。なお、05Da区の中央付近に所在する筒形容器 SK63からは、鹿などの繊細な文様を施した筒形容器がほぼ完全な状況で出土している。(赤塚次郎)



筒形容器の文様



05Da区遺構配置図(1:100)

Cc・Cd区 今年度の調査としては、比較的調査面積の広いCc・Cd区について触れ、まとめとしたい。

05C区は朝日遺跡南集落の東南端にあたる。後期南集落の外環濠をCc区からCd区へ縦断するように確認した。この外環濠とした溝は、南集落寄りのCc区SD01とSD01の外側に展開するCd区SD06の2条ある。両者は、おそらく虎口状に重複しながら開口部を形成したと思われる。Cc区では、谷Bの縁辺部に沿って高蔵式の土器集積を確認した。本来この堆積層は朝日Y層、つまり山中式を中心とした遺物を含む層位である。おそらく、山中式の時期に掘削した時、大量に出土した高蔵式の遺物群を投棄した結果であろう。調査区ほぼ全域にわたって、貝田町式から高蔵式を中心とした建物群が展開する。壁溝の形から、ほとんどが長方形プランの竪穴建物と考えられる。掘立柱建物もいくつか想定できるが、壁溝のめぐる竪穴建物にくらべ確定しにくい。概ね調査区東寄りには方形周溝墓を中心とした墓域が建物群と接しながら展開する。確認した方形周溝墓のほとんどは高蔵式に比定できる。(永井宏幸)

